
化かす相手は

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化かす相手は

【Nコード】

N8061E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

山の中で退屈していた妖怪達。その退屈しのぎに都に降りて人を驚かせようとするがここで城に忍び込むと。ジャパニースファンタジーです。

第一章

化かす相手は

京の都に近い山奥で。妖怪達があれこれと話していた。

「全く最近はこのう」

「わし等にとつて暮らしにくい世の中になったものじゃ」

「全くじゃ」

酒を囲み車座になつて話をしていた。

「酒はまずいし食い物も味が落ちた」

「それに人間がこのう」

「何かわからんようになってきたな」

一つ目小僧が河童に対して言つていた。どうにもしょぼくれた顔で胡瓜や葡萄を食べている。

「変わったのか？」

「変わった変わった」

山わろが一つ目小僧の横ではやすように言つてきた。

「それもかなりな」

「まあそうじゃな」

山わろの言葉に一際大きな鬼が憮然とした顔で答えた。金棒を横に置いてあぐらをかいて如何にも面白くなさそうな顔で小さな杯を手にして言つのだ。

「何かというと鬼退治じゃ鬼退治じゃと山に来ておつたのに今では」

「とんと山に来ん」

「何か都で騒いでばかりじゃのう」

こう言つてぼやき合つのであつた。

「おかげで化かすこともできん」

「こつちは退屈で仕方がない」

「どうしたものか」

「いやいや皆の衆」

ここでぬらりひょんが一同に対して述べてきた。

「そう悲しむこともないぞ」

「悲しむことはない」

「そうじゃ。確かに人は山に来ることはなくなった」

そのことを一同に言う。

「それは間違いのないことじゃ」

「そう、来ないのじゃ」

「おかげで退屈で退屈で」

「だったら人のいるところに行けばよいのじゃ」

これがぬらりひょんの提案だった。

「人のいるところに？」

「そう、都じゃな」

「うむ、都じゃ」

「何か近頃痩せてやけにきんきん声の男が出て来て威張っておるそうじゃな」

山奥でも人の話はある程度聞いていた。そのうえでの言葉である。

「その男を見るのか？」

「それだけで都に行くのか」

「いや、そうではない」

だがぬらりひょんはそれは否定した。

「それは違うぞ」

彼もまた一杯やりながら述べるのだった。

「わしが言いたいのはな。人がいるところに降りてじゃ」

「うむ、降りて」

「それからどうするのじゃ」

「そこで化かすのよ」

彼が言うのはそれであつた。

「昔は皆も都に降りたじやろう」

「まあな」

「今みたいに荒れ果てる前はな。よく出て人を驚かせてやった」

鬼が言ってきた。

「しかし今ではのう。都も荒れ果てて」

「詰まらんようになった」

「全く詰まらんことばかりじゃ」

「子泣き爺と一反木綿がぼやく。」

「最近は知らんがの」

「どうせ今も」

「ところがじゃ」

しかしここでまたぬらりひょんが言うのだった。

「そのきんきん声がのう。都を随分建て直したそうなのじゃ」

「都をか」

「それで人がそこに集まっているそうじゃ」

このことを皆に話すのであった。

「それならばそこに言つて驚かせばいいとは思わんか？」

「そうじゃのう、確かに」

彼の言葉に最初に頷いたのは輸入道だった。

「人がいるところにおらなければどうしようもないからのう」

「このまま酒を飲んで食つてばかり」

傘が面白くなさそうに述べた。

「思えば詰まらんことじゃて」

「よし、ならば決まりじゃ」

ぬらりひょんはここで話を纏めた。

「皆で都に出るぞ、よいな」

「都にか」

「そこで人共を驚かせるのじゃ」

楽しげに笑い酒を一杯啜りながら述べる。

「化かしたりしてな。それでどうじゃ」

「普段は物陰に隠れたり人に化けたりしてじゃな」

「その通りじゃ。悪い話ではあるまい」

「うむ、それではな」

「それで行こうぞ。思い立ったが吉日じゃ」

彼等は口々に言い合いとりあえず周りにある酒や食い物をせかせかと胃に詰め込んだ。まずはそうしたものを全てどうにかしてからだった。

「行こうぞ行こうぞ」

「都にな」

こうして彼等はとりあえず人間に化けて都に出た。都はもう彼等の知っている都ではなかった。実に人が多く豪華絢爛な有様だった。いや、これはどうしたことじゃ」

「つい最近まで草ぼうぼうで荒れ果てておつたのに」

砂かけ婆と塗り壁が周りを見回して驚いている。塗り壁はやけに大柄で横にも広い男になっている。だが余り人間には見えないところもあった。

「それがこんなに変わるとは」

「ほんの五十年で」

「五十年。短い間じゃな」

「全くじゃ」

ぬらりひょんは右手で扇を使いながらももんじいの言葉に頷いた。

「ほんの五十年でここまで変えるとは」

「人間もまた凄いものじゃな」

「んっ、何じゃあれは」

ここで一旦木綿がふと何かに気付いた。彼は顔が四角く今にも吹き飛びそうなるひよろつとした白い男に化けていた。やはりあまり人間には見えない。

「あそこでやっておるのは。芝居か」

「芝居!？」

「ほれ、あれじゃ」

何か騒がしい小屋を指差す。赤や青、黄色の看板がありその下に人が集まっている。一旦木綿はそこを指差していたのである。

「あの小屋じゃ」

「あの小屋がどうしたのじゃ？」

砂かけ婆は殆どそのままだった。

「面白いことをやっているみたいじゃぞ」

「ふむ、面白いことか」

「芝居か」

彼等はそれを見てそれぞれ小屋を見る。見れば見る程興味が沸いてくるのを感じていた。

「入るか？」

鬼が言った。

「面白そうじゃぞ」

「そうじゃな。じゃあ入ってみるか」

「うむ。そうしよう」

これで決まりだった。こうして彼等は小屋に向かった。だが入ろうとするところで不意に並んでいる人に止められてしまった。

「何じゃ、どうしたのじゃ」

「わし等が何かしたか？」

「困るなあ、並んでくれよ」

「皆並んでるんだぞ」

「並ぶ！？」

妖怪達は並ぶと言われて目を丸くさせた。驚きのあまり変化が溶けそうになっている。

「並ぶという又何じゃ」

「何なんじゃ」

「だから。順番なんだよ」

困惑している彼等に小屋の中から出て来た若い男が言ってきた。
「順番とな」

「簡単に言つとな。この列の一番後ろに並んでな。それで少しずつ列が前にいくからそれに続いて小屋に入ればいいからさ」

「ふむう。そうか」

「そうすればいいのじゃな」

妖怪達はそれを聞いて納得した顔で頷き合う。話を聞けば何と違うことはない話だ。しかしわかるまでにはかなりの手間がかかったのだった。

「では並ぶとしよう。いいな」

「そうじゃな。皆で仲良く並んでな」

「しかし。それにしても」

彼等はここで列を見る。さっきよりまだ長くなっていた。

第二章

「この列は。さつきより長くなっていないか？」

「これはかなり待ちそうだな」

「まあいいではないか」

ぬらりひょんは彼等を宥めるようにして声を出してみせた。

「それはな。構うことはない」

「構わんか」

「山の中にいると思えばよいではないか」

「それもそうか」

「そうじゃ。だから待つとしよう」

こう仲間達に言う。

「丁度ほれ。食い物でも口にしながらな」

「おお。そういえばじゃ」

「見ろ、あそこを」

傘が傘に化けた状態で言ってきた。ただ傘になっていればいいのだから彼はかなり楽だった。

「あそこの菓子か何か凄い美味そうじゃぞ。あれを食いながら待つてはどうか」

「おお、そうじゃな」

「それはいい」

仲間達もそれに頷き一人が菓子を買いに行った。そうしてそれを食べながら芝居を待つ。芝居までそれを食べながら時間を潰した。そして待ちに待った芝居を観てそれから堪能した顔で小屋から出たのだった。

「いやあ、中々」

「面白かったのう」

彼等は口々にその堪能した顔で言い合う。

「出雲阿国とかいったのう」

「うむ」

芝居をしていた女の役者の名前が出た。

「人間の女じゃが中々いいものじゃった」

「あの神様の。ほれ何というたか」

河童は頭が禿げて背の小さい侍になっていた。

「何とかいうじやろう」

「何とかでわかるか」

「あれじゃあれ」

無理矢理目を動かしてついでもう一方に目を作って入れた一つ目小僧に対して言う。

「アメノウズメとかいったな」

「ああ、あの神様か」

「あれに匹敵するよさだったのう」

「それは褒め過ぎではないのか？」

「褒め過ぎではないぞ」

殆どそのままの天狗に対して少しムキになって言葉を返した。

「あれはまことに。素晴らしきものよ」

「やはり褒め過ぎじゃ」

「全く」

「わしは菓子がよくったのう」

鬼は今度は水飴を舐めている。壺ごと左手に持ちそこに大きなヘラを突っ込んで次々に口に入れている。その大きな口の周りが飴べつたりと濡れている。

「この水飴にしるな。安くなったわい」

「そうそう、菓子も安くなった」

「全くじゃ」

妖怪達は今度はこのことを言い合うのだった。

「その五十年前までそれこそ貴族の屋敷にこっそり入ってじゃったのに」

「今ではおおっぴらに買って食べる。全然違うのう」

「違うなんてものじゃないぞ」

鬼は仲間達に答えた。

「この水飴なんてもう。寺の糞坊主が持っておればいいもので」

「そうじゃったな」

「味も全然違う」

舐め続けながら言う。

「格段に甘くなっておるわ」

「しかし。あれじゃろ？」

一つ目小僧が怪訝な顔で仲間達に尋ねてきた。

「何じゃ？」

「まだ人は戦をしておるのじゃろ」

彼が言うのはそれだった。

「確か。それは」

「うむ、その通りじゃ」

彼の言葉にぬらりひょんが答えた。

「まだあちこちで戦が行われているぞ」

「それでどうして都はここまで急に」

「そのきんきん声が頑張っておるらしい」

「そいつが」

「うむ、そうらしいな」

ぬらりひょんはこう仲間達に対して述べた。

「どうやらな」

「ふむ。きんきん声のう」

「どういった奴か」

彼等も話を聞いていて次第に彼に対して興味を持ちだした。

「見てみたくなったな」

「そうじゃな。それではだ」

「うむ。我等の見るのはな」

ここで彼等の心に悪戯心を宿らせる。これはほぼ妖怪の習性のよ
うなものだった。

「見方はわかつておるな」

「驚かすか」

「その通り。では早速そのきんきん声のところに行つてやるか」

すぐにこうすることに決まつたのだつた。ここまでの話の流れは実に早かつた。こうして彼等はそのきんきん声を驚かすことにしたのだつた。

だがここで。一つの問題があつた。

「それはそうとしてじゃ」

「どうしたのじゃ？」

輪入道が子泣き爺の声に顔を向けた。

「そのきんきん声は何処におるのじゃ」

問題はそれだつた。彼等はきんきん声は何処にいるのか知らないのだつた。

「都なのか？」

「そうではないのか？」

彼等はただ何となくこう思ふのだつた。

「都をここまで立派にさせたのだからな」

「そうじゃないのか？ 藤原だの足利だのも都におつたしの」

「あの平とかいうのもな」

「うむ。それならじゃ」

彼等は自分達の記憶を辿つて話をする。話をしていつてそれが自然だと思つていたのである。ところがだ。都で遊んでいるうちにそうではないらしいということがわかつた。

「そのきんきん声じゃかな」

「うむ」

彼等は夜鴨川のほとりで車座を囲んで飲んでいた。辺りに人はおらず都で買った酒や御馳走で宴を開いていた。鬼火を灯りに出してそれを頼りに明るく楽しんでいる。

第三章

「普段は稲葉山におるらしいぞ」

「稲葉山というと確か」

「美濃の」

彼等の記憶ではそうであるのだ。

「あそこにおるのか」

「それか戦の場におるらしいな」

「随分忙しい奴なのか」

「それでも時々都に来るらしい」

天狗がここで言った。

「そっちの仲間から聞いたぞ」

「美濃の天狗にか？」

「そのきんきん声の名前も聞いた」

河童に対して答える。彼等は今は人に化けてはいない。元の姿に戻ってその姿で飲んでいた。

「そうか。それで何というのじゃ？」

「何でも織田信長というらしい」

ここでこの名前が出た。

「随分気が短くて何かというと刀を振り回すらしいな」

「物騒な奴じゃな」

「昔からそういうのはおるな」

「それでじゃ」

仲間達の言葉を聞きながらまた述べる。

「そのきんきん声は今この都におるらしい」

「おお、そうか」

「それはいい」

妖怪達はその言葉を聞いて皆笑みを浮かべた。

「ならすぐに行けばいいな」

「驚かしてやるか」

「そうじゃな」

「それでじゃ。その場所は？」

塗り壁はそこを尋ねた。

「この都の何処におるのじゃ？」

「どっかの寺か？」

「二条城じゃ」

天狗は仲間達の問いに対してこう答えた。

「そこにおるとのことじゃ」

「今もか」

「左様、今もじゃ」

そう述べた。

「今もおるらしいぞ」

「ふむ、それを聞いたら話が早い」

鬼は天狗の話を聞いて意を決した顔で頷きながら述べた。

「早速二条の城に行こうぞ」

「今からか」

「丁度酒も馳走もなくなった」

見ればもうなくなっていた。実にタイミングがいい。

「行ってもいいじゃろ」

「そうじゃな。腹ごなしに丁度いいしな」

「行くとするか」

山わろと一旦木綿が鬼のその提案に同意した。

「皆で行くのじゃろ？勿論」

「それは当然じゃ」

ぬらりひょんが話を纏めるようにして言い切った。

「誰か一人置いてもいかんし抜け駆けもいかん」

「楽しみは皆でじゃな」

「その通り。では行くぞ」

「うむ」

酒を飲み終えたところで皆立ち上がった。そうしてその足で二条城に向かうのだった。途中正体で都を歩いていたので警護の侍達や夜道を歩く者達が驚く声をあげる。彼等はそれを聞きながら楽しく城に向かつていた。

「愉快愉快」

「人の驚く声はやはり最高じゃ」

彼等は横から後ろから人々が驚き慌てる声を聴きながら楽しく城に向かつていた。時折前からも声が聴こえるが彼等はすぐに逃げ去っていく。その中で進んでいく。

そして遂に二条城まで来た。ここまで来ると一旦姿を消した。

「ではよいな」

ぬらりひょんは姿を消したうえで仲間達に声をかける。

「行くぞ」

「うむ、いよいよか」

「きんきん声、果たしてどんな顔か」

彼等はもうこれからのことが楽しみで仕方がなかった。

「見てみたいのう」

「特に驚く顔が」

「正面から行くぞ」

ぬらりひょんは今から楽しみで仕方がないといった様子の仲間達にまた言う。

「よいな」

「よし、わかった」

「参ろうぞ」

「きんきん声のところにな」

こうして彼等は姿を消したまま城の奥に向かうのだった。城といふよりは屋敷でありそこを進んでいくのは彼等にとってみても存外楽しいものであった。

「いやいやここもまた」

「いいものじゃのう」

こう言いながら奥に奥にと進んでいく。その頃その城の奥では。

「今宵は随分と騒がしいのう」

「何でもあやかしが出たとか」

「あやかしとな」

「はい」

奥の座敷であつた。そこで若い小姓が上座にいる細面の男に対して述べていた。見れば顔は白く鬚は総髪を後ろにやっている感じだ。鋭利な鋭い目をしていて全体的に剣呑な印象を与える。だがそれでも美形と違っていい顔ではあつた。

「今宵都のあちこちで出ているそうぞ」

「ふむ、嘘であろう」

男はそれを聞いてすぐにそう述べた。

「大方酒に酔つておるのじゃ」

「酒ですか」

「そうじゃ。だからそんなものを見るのじゃ」

男は小姓に対してもこう述べる。

「そうではないのか？」

「果たしてそうであればよいのですが」

小姓は畏まりながら彼に言葉を返す。

「どうなのでしょう、そこは」

「何か言いたそうじゃな」

「それは」

「よい」

ここで言葉を許すのだった。

「許す。言つてよいぞ」

「宜しいでしょうか」

「そちの考えを聞いておきたい。どう考える」

「都は昔よりそうした話が多いです」

彼は男の許しを得てからこう述べるのだった。

「ですからやはり」

「あやかしだと思うか」

「そうではないでしょうか」

あらためて男に対して答えたのだった。

「やはり。これは」

「あやかしか」

男は小姓の言葉を聞いてそれまで両膝にそれぞれ置いていた手を服の中に入れてそのうえで組むのだった。考える姿勢である。

「まことにおるか」

「いるのでは」

また男に対して答える小姓であった。

「やはりそれは」

「おるならおるで見てみたいわ」

男はあらためて答えた。

「この目でな」

「この目で見ないことにはわからん。さて」

男は腕を元に戻した。そしてまずは灯りを見た。灯りは彼の顔を静かに照らしている。その周りには虫が少し寄っていた。だがその虫には構わずにまた小姓に顔を戻すのだった。

「もう遅いな」

「休まれますか」

「いや、暫しここにおる」

だが彼は今は休まないと言うのだった。

「ここにな。しかしそなたはもう下がってよい」

「左様ですか」

「元の持ち場につけ」

そして今度はこう述べた。

「よいな」

「はっ、それでは」

こうして小姓は去り男一人になった。彼はそのまま一人で座敷の中で考える顔でいた。だがそうして考えていたがふと部屋の中に何

かが入って来る気配を感じ取ったのだった。

「何者じゃ」

「むっ、何者じゃと」

「まさかわし等に気付いたのか？」

「気付いたも何も気配でわかる」

男は姿を見せぬ相手に対してこう言ってみせた。

「気配で丸わかりじゃ。この信長の目は誤魔化せぬぞ」

「信長！誰じゃそれは」

「聞いたことがないぞ」

妖怪達は皆姿を消したまま部屋の中に入っていた。そのうえであれこれ話をしていたが実は信長とは誰なのか全く知らなかったのである。

第四章

「わし等が聞いているのはきんきん声だけじゃったぞ」

「そうじゃ、どうしてそのきんきん声がおらずにこの信長とかいうのがおるのじゃ」

「きんきん声か」

男はそのきんきん声という名前を聞いて微笑んだのだった。

「面白い仇名じゃな」

「仇名なのか？」

「名前ではないのか」

「すると姿が見えぬその方等はじゃ」

男はまた彼等に対して問うてきた。

「あれか。織田信長という男は知らぬのか」

「織田信長？　そういえばいたか？」

「何か都で名前を聞いたようなそうでないような」

つまりはよく知らないということであった。

「いたような気がするがな」

「何かしておるのかのう」

「どうにも頼りないのう。まあよい」

男はここまで聞いたうえでまた声を出してきた。

「それでじゃ。きんきん声をどうしたいのじゃ？」

「それは決まっておる。化かすのじゃ」

「化かすとな」

「左様。何でもそのきんきん声とやらはかなり怒りっぽいと聞く」

「そのうえ今この日の本の国で最も偉い男と聞く」

彼等にとってはまず怒りっぽいことが前提条件らしい。

「それではじゃ。そうした者なら」

「是非化かして驚かせてやらねばのう」

「また随分と変わった考えじゃな」

男は彼等の話を聞いてこう述べた。

「普通は密かに殺してしまうとかなるであろうに」

「馬鹿を言え、わし等は人と違う」

「違うのか」

「左様、つまりな」

「わし等はだ」

「あやかしか」

男の方から言ってきたのだった。

「そうじゃ、あやかしじゃ」

「妖怪だの化け物だとも言われるがそれはよい」

話が碎けていたせいであろうか。彼等は自分達からこのことを言い出していた。また随分と迂闊と言えば迂闊である。自分達では氣付いてはいないが。

「呼び名はな」

「それでじゃ」

またしてもきんきん声からの言葉だった。

「そのきんきん声じゃがな」

「知っておるのか!？」

「何処におる」

「まあ待て。話を聞くのだ」

笑いながら彼等に対してまた言う。

「今はおらぬ」

「おらぬだと」

「無駄足じゃったか」

「じゃが。わしからやりたいものがある」

「やりたいものとな」

「それは一体」

「これ」

ここで彼はぽんぽんと手を叩いて人を呼んだ。するとすぐにあの小姓が出て来たのだった。

「何でしょうか」

「酒を持ってまいれ」

「酒ですか」

「肴とな」

「それは宜しいのですが」

だが彼はここで難しい顔になるのだった。

「しかし」

「無論菓子や果物じゃ」

笑ってこつも注文をつけてきた。

「それも酒と同じ位な。よいな」

「そうですね。ならば」

「すぐに山程度持つて参れ」

笑いながらまた小姓に対して述べる。

「わかつたな」

「畏まりました」

こつして彼の言葉に従い酒や菓子が持つて来られた。それはすぐに男の前に置かれた。彼はそれを前にして妖怪達に対して告げた。

「ささ、遠慮はいらぬぞ」

「むつ、まさかこれは」

「ひよつとして」

「そのまさかよ。ささ、飲んで食え」

さらに勧めてきた。

「思ふ存分な」

「いいのか」

「それで」

「だから遠慮はいらん」

彼はそれをまた妖怪達に対して言つのであった。

「遠慮はな。だから好きなだけやれ」

「ふむ、それでは」

「言葉に甘えてな」

「わしはこうした時はな」

男はふと苦笑いになったうえで述べてきた。

「酒は飲めんのだ」

「ほう、意外じゃな」

「飲めんのか」

「うむ、飲めん」

このことをまた言ってみせる。

「じゃから菓子じゃ。それでもよいな」

「よいぞよいぞ」

「結構なことじゃ」

妖怪達はまだ姿を見せてはいないがそれでも声は笑っていた。

「騒げればそれでいい」

「ではそろそろ」

「姿を見せい」

彼の方から妖怪達に告げる。

「そうして楽しくやろうぞ」

「うむ、それではな」

「皆でな」

「今日はあやかしも人もない」

男もまたもう菓子を手にして上機嫌であった。

「無礼講じゃ。よいな」

「無礼講こそわし等じゃ」

「では遠慮なくな」

「やらせてもらおう」

こうして彼等は男と共に宴に入った。既に姿を現わし馬鹿騒ぎをやってどんちゃんやっていた。そして随分と酒も菓子も食べ楽しんだ後で。ぬらりひょんがふと男に言ってきた。

第五章

「それでじゃ」

「何じゃ？」

男は自分の横に来て親しげに声をかけてくるそのぬらりひよんに対して応えた。今度は柿を食っている。見れば柿のへたも随分とある。

「きんきん声のことじゃが」

「その男か」

「ここにはおらぬとなるとじゃ」

彼は怪訝な顔をして述べる。その顔はもう真っ赤だ。

「何処におるのじゃ」

「明日じゃ」

男はふとした感じで言ってきた。

「明日またここに来るのじゃ。そうすればおる」

「おるのか」

「うむ」

ぬらりひよんの言葉に頷いてみせてきた。

「おるぞ。だから明日また来るのじゃ」

「よし、わかった」

「明日か」

ぬらりひよんだけでなく他の妖怪達も男の言葉に対して頷いたのだった。

「明日また来よう」

「そうしてきんきん声を今度こそな」

「驚かせやる」

楽しそうに語り合うのだった。

「是非な」

「やろうぞ」

また言い合う。

「では明日またここにな」

「御主はどうするのじゃ？」

「わしか」

男は妖怪達に言われて声をあげた。

「わしはどうするか」

「そうじゃ。まあわし等はわし等じゃが」

「それでもな。御主は」

「わしはまああれじゃ」

ここで彼は言葉をはぐらかしてきたのだった。

「あれという？」

「特にな。何もせん」

こう言うのであった。

「何もせんぞ。別にな」

「そうなのか」

「左様」

今度は頷いてみせてきたのだった。

「おるだけじゃ」

「何じゃ、御主も入ればよいのに」

「まあよい。無理強いはせん」

そもそも妖怪というものは人間の世界は別の存在だ。だから人間の様にここで無理強いをすることはないのだ。だからここでは彼を誘うことはなかったのだ。

「明日またここに来よう」

「それで楽しくやろうぞ」

こういい残して彼等は姿を消した。男はそれを見届けると両手でポンポンと叩いた。するとすぐにまたあの小姓が出て来たのだった。小姓は部屋に入るとまずは驚きの声をあげたのだった。

「何と、これは」

「どうかしたか」

「あれだけあつた酒も肴も菓子もなくなるとは」

「客人が来てな」

「客人!？」

「そう、それはまた出て来る」

男はこう告げるのだった。

「明日な」

「明日またですか」

「これだけ言えばわかるな。明日の夜また用意しておけ」

「酒に肴に菓子をですか」

「うむ。わかつたな」

「わかりました」

彼の言葉に対して頷くのだった。

「それではそのように」

「頼むぞ。さて」

ここまで伝えると楽しそうに笑ってみせてきた。

「明日もまた楽しみじゃ。思えばじゃ」

「思えば？」

「わしは今まで人と人の世だけを見ておつた」

彼はふとした感じで言葉を出してみせた。

「じゃが。他の世界を見るというのも面白いものじゃな」

「はて。その言葉の意味は」

「うむ。それはどうでもいいことじゃ」

これ以上は言おうとしないのだった。

「とにかく明日また持つて来い。よいな」

「わかりました。それでは」

「さて、明日じゃな」

男はまた明日のことを言葉に出してみせた。

「楽しみにしておこうぞ」

こう言つてその日は終わった。話が終わると彼はすぐに眠りに入つた。眠りに入るとそれはすぐに次の日になった。そしてその夜。

二条城の前に姿を消した妖怪達が集まっていた。

「さて、また入るか」

「うむ」

ぬらりひょんがももんじいの言葉に頷いていた。

「ゆづるりとな。楽しませてもらおう」

「それでじゃ」

彼等は話す。

「きんきん声がおるのじゃな」

「いよいよじゃな」

彼等の中で面白い緊張が走る。

「きんきん声がどの様な者かは知らぬが」

「偉そうな者を驚かすのが何よりも楽しみじゃ」

「これこそが妖怪だった。彼等は口々に話す。

「ほれ、昔おつたじやろう。あの平とかいう」

「おお、あの入道か」

昔の話を楽しそうに話した。

「ちよつと庭に出て来たところを驚かしてやったのう」

「左様左様、しかしびくともせんかったが周りの者が逃げさって面白ことじゃった」

「あれはあれで面白かった」

その時のことを思い出してけらけらと笑っている。姿は見えないが声だけ聞こえているので城の前の兵達はかなり焦っている。

「また怪異か」

「都の百鬼夜行か」

「ふむ、小者が驚いておるな」

「これはこれで愉快じゃが」

まずはこのことに喜んでいた。

「しかしな。それでも」

「本命はやはりきんきん声」

やはり狙いはそれであつた。

「行くぞ」

「うむ」

こうして彼等は姿を消したまま城の中に入った。道はもう昨日行っていたので充分わかつている。それですぐに昨日の部屋に入るのだった。見れば上のところは簾があつてその向こうが見えないようになっている。だがそこから声がしてきたのであった。

第六章

「誰じゃ？」

「むつ、やはりおったか」

「ではそこにおるのは」

「左様、わしの名は信長」

簾の向こうの声は言う。

「織田信長じゃ」

「ふむ。では間違いないわ」

「きんきん声じゃ」

彼等は今までの話からきんきん声というのは織田信長であるということがわかっていたのだった。それを確認してまずは喜ぶのだった。

「遂に巡り合えたか」

「それでは。覚悟はよいな」

「覚悟とな」

「そうじゃ。一つ言っておこう」

妖怪達を代表してぬらりひょんが言ってきた。

「わし等は御主に会いたくてここに來たのじゃ」

「わしに会いたくてか」

「わし等は妖怪じゃ」

自分達から名乗ってみせる。

「あやかしとな」

「左様、何を隠そう御主に用があつて参った」

「あやかしの付き合いなぞ持った覚えはないぞ」

簾の向こうの声はとぼけたように言ってきた。

「それがまたどうしてじゃ」

「御主に用がなくともわし等は違う」

「あらためて言う。覚悟はよいな」

この言葉をまた言ってみせる。

「わし等は容赦せぬ」

「ここで御主を」

一斉に姿を現して上座に駆け寄る。そうして一気に簾を開けて叫ぶのだった。

「覚悟せよ！」

「喰らってやるわ！」

「うむ、喰らおうぞ」

「何っ!？」

今の言葉を聞いて妖怪達は。一斉に声をあげたのだった。

「喰らうとな」

「どういうことじゃそれは」

「それはこういうことじゃ」

見ればそこにいたのは何と。昨日のあの男だった。微笑みつつ一人上座に座っていたのだった。

「まさか御主が」

「きんきん声じゃったのか」

「左様」

また妖怪達に笑って言ってみせる。妖怪達もその動きを完全に止めていた。鬼に至っては右手に大きく振り被った金棒をそのままにして硬直していた。

「実はそうだったのじゃ」

「何とまあ」

「これは」

妖怪達は思わぬ事態に呆然とするばかりだった。

「思いも寄らなかつたわ」

「御主がきんきん声だったとは」

「意外だったようじゃな」

「意外も何もじゃ」

「こんなことは思わなかつた」

妖怪達は呆然として言葉を出し続けるばかりだった。

「わし等が化かされたのか」

「妖怪であるわし等が」

「人間も化かされているばかりではないぞ」

彼は破顔して妖怪達に告げる。

「こうして逆に化かすこともあるわ」

「抜かったのう」

「完全にしてやられたわ」

「参ったか」

「参った」

皆苦笑いを浮かべて彼に答える。

「まことにのう」

「人間も強かじゃ」

「さて、化かしたついでにじゃ」

きんきん声がここでまた言ってきた。

「今宵はこのまま帰るのか」

「化かしたつもりが化かされた」

「それではのう」

実際に気落ちしていた。それでそれをきんきん声に対しても言う。

「どうしようもないわ」

「今宵はこのまま帰るわ」

「いやいや、それには及ばぬ」

しかしここできんきん声は彼等呼び止めてきた。

「何じゃ？」

「今宵も楽しくやろうぞ」

「楽しくじゃと」

「そうじゃ。もう用意してあるぞ」

こう言って後ろを指し示すと。そこには酒と肴、それに菓子等が山の様に置かれていた。既に用意してあるのだった。

「さあ遠慮はいらんぞ」

「もうあるのか」

「用意がいいのう」

「だからじゃ。早く食うがいい」

また妖怪達に対して述べる。

「何度も言うが遠慮する必要はないからな」

「遠慮せんのがわし等じゃが」

「しかし」

「それはそれ、これはこれじゃ」

頂垂れる妖怪達に対してまた言ってきたのだった。

「早く食べよ。よいな」

「これはこれ、それはそれか」

「違うか？御主等は確かに化かされた」

彼はまた言う。

「じゃがそれはそれではないか」

「そうか」

「そうじゃ。だから早く食べよ」

「ううむ」

「遠慮はいらんか」

「だから何度も言っておろう」

きんきん声はいい加減不気味なまでに遠慮する彼等に対して顔を顰めさせてきた。

「早く飲んで食うがいい。あやかしは遠慮せんのじゃろう？」

「ううむ、そうじゃな」

「それでは」

何度も言われて彼等も遂に従うことにした。静かに酒や菓子のあるところに向かいそれをきんきん声を中心に置いて円座を作った。そこにそれぞれ座るのだった。

「ではそうさせてもらおう」

「喜んでな」

「うむ。しかし何じゃな」

彼等が座りそれぞれ言ったところできんきん声はまた言ってきた。

「こうしてみればあやかしも面白いのう」

「ほっほっほ、そうじゃぞ」

今の彼の言葉にはあやかし達も笑ってみせる。

「妖怪の世界は楽しいぞ」

「一度なればもう止められぬ」

「止められぬのか」

「御主も人でなくなったら妖怪になれ」

かなり奇妙な言葉ではある。

「嫌なことは何一つないぞ」

「何一つか」

「そうじゃ、何もな」

「だからいいのじゃ」

彼等は口々にきんきん声に対して言う。

「そうじゃな、御主はさしづめ」

ももんじいがきんきん声を指し示して笑いながら述べる。

「きんきん声じゃな。その声で」

「ははは、そうじゃな」

それにぬらりひょんも頷く。やはり彼も笑顔だった。

「声がそれじゃからな。やはりな」

「ふむ、妖怪きんきん声か」

本人もそれを言われてまんざらではないようだった。

「では五十年の人間、それが終わったらなってみるとしよう」

「うむうむ、待っておるぞ」

「楽しみにしておるからな」

妖怪達は今のきんきん声の言葉を受けてどっと笑って言ってみせた。京の都であつた面白い話だ。古い話だが幸いにして伝わっている話である。

化かす相手は

完

2
0
0
8
・
6
・
1
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061e/>

化かす相手は

2010年10月8日15時31分発行